

ガードワイヤーは2002年から臨床使用可能となり、2006年からはワンタッチ型に改良された。近年ガードワイヤー使用中の症例3例で過拡張が生じたので報告する。ガードワイヤーの過拡張は血栓吸引時に生じており、臨床工学技士のあいだで手順の確認を行った。血栓吸引後にガードワイヤーの先端バルーンをデフレーションする操作に差があった。通常の手順ではデフレーションは、wireをゴールドマーカークリップにはめ込みバルーンダイヤルはさわらず上下のJAWは開いた状態でデフレーションを待機する。術者のデフレーションの指示でJAWをCLOSEにし直ちにdeflationを行っていた。技士によっては、血栓吸引中にすぐにデフレーションできるようにアダプターへのセッティングを行って準備していた。その際、インフレーションダイヤルは拡張時のままであった。この手技により過拡張が生じていたと思われた。この現症を検証するために体外にて実験を行った。先にアダプターへのセッティングを行った事でwireのインフレーションポートがOPENとなり、さらにインフレーションダイヤルが拡張時の値に設定されていたため、JAWをCLOSEにした際に生じた圧力の逃げ場がなくなり先端バルーンに過拡張されたと推測された。JAWを比較的ドライにした状態でCLOSEした場合は生じず、JAW部分からのエア混入を防ぐためにウェット状態でガードワイヤーの操作手順により過拡張が生じる現象とその原因が明らかとなったので報告する。